

あぐりん村 長久手町田園バレー交流施設

—農のある暮らし・農のあるまちを目指して—

社団法人中部開発センター

企画事業部 折戸厚子

2005年、日本国際博覧会（愛・地球博）の主会場として、全国的な脚光をあびた愛知県長久手町は、名古屋市の東に隣接するベッドタウンとして、近年、着実に発展している。

町内は、宅地開発が進み市街化された西部と、昔ながらの田園風景・里山を残した東部という、二側面を持っている。この都市と農村という特性をうまく共存させていくためのキーワードとして、町が選択したのが「農業」である。

長久手町は、農業の活性化と、それによる農都共生社会の実現を目指した「長久手田園バレー構想」を進め、その一貫として、2007年春、農産物直売所やふるさと薬膳レストランを複合する「あぐりん村」をオープンした。



長久手町の概要

長久手町は、愛知県北西部、愛知郡の町で、名古屋市の東に隣接する。小牧・長久手の戦いの舞台として知られる歴史の町で、現在では、4つの大学がある文教の町、名古屋市都心まで地下鉄で30分のベッドタウンとして、発展している。

2005年日本国際博覧会「愛・地球博」の主会場が置かれたことをきっかけに、周辺道路がめざましく整備され、公共交通も日本では初めての実用的な磁気浮上式鉄道（リニアモーターカー）が通るなど、豊かな自然を残しながら、都市的利便性のある町として人口が増加している。

長久手田園バレー構想

長久手町では、名古屋市につながる街の西側は、市街地・住宅地として開発が進み、三河山間地へとつながる東側は、万博の行われた東部丘陵地帯の田園風景が広がっている。

この新しい住民が住む町の西側、昔からの住民が住む町の東側の交流を促進するため、また、しだいに遊休農地が増えていく長久手町の田園風景を守るため、長久手町は1999年、農業を活用したまちづくり「長久手田園バレー構想」を打ち出した。

2002年には、万博後のまちづくりを視野に、「農

のあるくらし・農のあるまち」の実現を基本理念とした「長久手田園バレー基本計画」を策定した。そのハード面での主要事業の一つが、2007年4月にオープンした「ながくて食と農の広場 あぐりん村」である。

あぐりん村のオープン

あぐりん村の名前は、アグリカルチャー（農業）という言葉をもとに、親しみやすくアレンジした、公募によるものである。

地元で採れた農産物や地域産品をそろえた大型の「農産物直売所 市・ござらっせ」、旬の野菜を使った新郷土食が味わえる「ふるさと薬膳レストラン 凜」、長久手産の野菜や米を使用した焼きたてのパンが並ぶ「パン工房」のほか、ふれあい農園やイベント広場などで構成されている。

あぐりん村の敷地は万博長久手サテライト会場跡地（万博会場外で万博をサポートするイベントを開催）で、2002年にオープンした「長久手温泉ござらっせ」が隣接している。

これは、町が天然温泉を掘り、日帰り入浴施設としては愛知県下一の年間50万人を集める人気温泉となったもので、相乗効果もあって、オープン以後のあぐりん村の客足もきわめて好調で、初年度目標を大きく上回る30万人の来場者と売り上げ4億円を達成できると見込んでいる。

なお、指定管理者制度を導入しており、「長久手温泉」「あぐりん村」共に「株式会社長久手温泉」



あぐりん村に隣接した「長久手温泉ござらっせ」

が運営を行っている。これは町、商工会、名鉄などが出資した第三セクターで、民間のノウハウを活用するために、支配人についても民間から公募を行った。

農産物直売所 市・ござらっせ

あぐりん村の中心となるのは、「農産物直売所 市・ござらっせ」で、地元産の野菜類を主に、県内産の肉類、加工品などを販売している。

毎朝、地元生産者の手で並べる、採れたての新鮮な野菜が安価で売っていると好評である。そのため、午後には売り切れてしまうこともしばしばあり、農産物の種類や量を増やしていくことが、今後の課題になっている。

農産物直売所は、「市・ござらっせの会」の会員が生産した農作物を中心に販売している。長久手町内では、専業農家が少なく、畜産物を提供する農家がないなど、種類が限られるため、隣接する市町にまで会員を広げており、約210人の会員の90人ほどが町外である。年会費は2,000円で、あぐりん村に、自分でつけた農産物の価格の15%（町外は16%）の販売委託料を支払うことになっており、バーコードでレジを通すたびに集計されるPOSシステムとなっている。

ふるさと薬膳レストラン凜

薬膳とは、食材のもつ様々な効能を引き出した、



農産物直売所 市・ござらっせ

また、2002年から平成こども塾として、農業を中心とした子供達向けの自然体験活動の提供に取り組んでいる。2006年には活動拠点となる丸太の家が完成した。周辺には竹林、畑、棚田、茶畑、小河川等があり、恵まれた環境を活用した自然体験プログラムを地域のボランティアの協力のもと、実施している。

こうした市街化された都市と自然豊かな田園の両面をあわせもつ長久手町でこそ実現可能な農都共生社会を目指している。この実現に向けた「長久手田園バレー構想」の事業目標は2020年である。

あぐりん村の概要

所在地 長久手町大字前熊字下田134番地

T E L 0 5 6 1 - 6 4 - 2 8 3 1

敷地面積 5,266.14m²

建築面積 1,287.45m²

延床面積 1,031.64m²

構造規模 木造平屋建て

建設費用 185,165千円

農林水産省：元気な地域づくり交付金

(やすらぎ空間整備事業) 75,000千円

URL

<http://www.nagakuteonsen.jp/agrin/index.html>

営業時間

農産物直売所

午前 9 時から午後 6 時まで

休／毎月第一月曜日・年始

ふるさと薬膳レストラン

午前 9 時30分から午後 6 時まで

休／毎月第一月曜日・年末年始

交通マップ



交通案内

地下鉄「藤が丘」駅より名鉄バス5番

(赤津・菱野団地 行)

「長久手福祉の家」停下車

(所要時間 約15分)

Nバス

長久手町内巡回バス

「福祉の家」停下車

インタビュー



長久手町建設部 田園バレー事業課課長
沖 義裕 氏

新旧住民の交流のキーワードに「農業」を

―農業は、長久手町の産業として大きいものなのでしょうか。

いいえ、それほど大きくはありません。農業を行っているのは400戸で、そのうち半分は市場に農産物を出さず、自分で消費する自給的農家で、遊休農地も15%ほどあります。農業が町の主要産業というわけではありません。

名古屋駅まで30分、自然に恵まれたベッドタウンとして、比較的富裕な町民が多く、税収はわりと豊かなのですが、これといった大きな産業はありません。

しかし、西側に住む新しい住民と東側に住む昔からの住民の交流や、町の東側に残された緑をいかに維持していくかの課題に、農業を活性化し自然環境を豊かにしていくことが、有効な手段になると考えたのです。

―こうした構想に、万博が開催されたことは影響があったのでしょうか？

大阪万博の会場であった千里ニュータウンは、万博後、人口は増えてきましたが、現在では増えた人口の高齢化問題を抱えています。

長久手町では、同じように万博が終わった後の

町として、人口が増えて、それで満足するのではなく、次の一手を動かしていきたいと考えています。その一手が農業や環境です。環境をテーマにした万博が開催されたことは、今後の長久手の町づくりに対して、精神的な柱になっていくと思います。

また、万博の影響で、長久手町では非常にボランティア活動が普及し、例えば、平成こども塾などは、年間200ほどのプログラムが実施されていますが、そのほとんどがボランティアによって運営されています。

ところで、こども塾では当初、小学校高学年が来ることを予想していたのですが、ふたを開けてみると、低学年の子供達が多かったのです。すると、付き添いに親もやってくるのです。そうした親達はこれまで環境について学んでいる世代ではないため、これをきっかけに農業や環境に関心を持っていただき、そこから輪がひろがっていくといいなと考えています。

―あぐりん村の特徴についてお聞かせください。

通常の直売所は、農業がさかんなところで農産物売るために作られるのに対して、あぐりん村は、農業がさかんでないところに直売所をつくり、今まで売っていなかったものを売れるようにして、農業を活性化していこうとするところが特徴の一つです。

具体的には、少量の野菜しか作っていないため、市場には出しにくかった既存の自給的農家の売り場を確保すること。また、田園バレー構想によって、農業に取り組むようになった新規参入者の売り場を確保すること。そうやって、既存農家のやる気を引き出し、せっかく募った新規参入者の農業を成立させるようにします。

建設に関しては、屋根から自然の光を取り込めるようにし、なるべく柱を少なくして開放的な空間にしています。また、木をふんだんにもちいて、産地直送をイメージできるようにしています。

―参考にした施設はあるのでしょうか？

大府市の「げんきの郷」や、碧南市の「あおいパーク」などの農産物直売所で、職員の研修をさせてもらいました。

どちらも農業の盛んな地域のため、長久手町のコンセプトとは違っていますが、経営的なノウハウは参考にさせていただきました。

隣接市町村から長久手町に来る人が増加

―あぐりん村は、どういったお客さんが多いのでしょうか？

まず、地元の方も新鮮な野菜が手に入るということでよく来られます。それから、名古屋という大消費地を控えていますので、そちらから来る人が多いです。隣接して温泉があり、そこに年間50万人ほどのお客さんがいますので、温泉に入ったついでに買い物に寄られる方もいます。温泉のお客さんの2割が町民で、8割は町外の方だそうです。

隣接する市町村の方は今まで、特に用事もないので長久手町に来ることはあまりなかったのですが、温泉とあぐりん村の建設後、豊田市や瀬戸市などからもお客さんが来るようになっていきます。

―長久手の名産などがあるのでしょうか？

将来、長久手ならではの食材ができればと努力しているところで、まだこれといったものはないのですが、安全、安心を目玉にして、できるだけ農薬の使用を減らした野菜類の栽培を促しているところです。

余談となりますが、そうした中で感じたのは、お客様である主婦の方の目はやはりすごいということです。農家の方が朝、持ってきた野菜は、良い物はあっというまに売り切れてしまいます。それで、店が空になってしまうと、売場として恰好がつかないので、近くの市場や流通センターから仕入れた野菜も一部扱っていますが、そうしたものはあまり売れません。

野菜の新鮮さや、農家の方がなるべく抑えた値段にしていることなど、違いを見抜かれるのでしょう。

―あぐりん村の運営体制についてお聞かせください。

あぐりん村は、(株)長久手温泉アグリ事業部が運営しています。第3セクターですが、経営的に独立してほしいと、支配人は、役所の人間ではなく、リクルート社を通じて公募した中から選ばれています。

また、町民を主体とした田園バレー会議をあぐりん村建設前から公募して、その会議で、建物の配置や、支配人の面接などの重要事項を決めています。

また、町の施策であるとともに、経営的にも赤字を出さずに成り立たせるために、専門のコンサル業者に依頼して、町と長久手温泉アグリ事業部とコンサル業者の3者で、運営方法について討議を重ねています。

―赤字を出さずに経営がなりたつのでしょうか？

温泉は年間50万人が入ります。これは公衆施設的な日帰り温泉施設としては、全国で2～3位だそうです。年間7,500万円ほどの入湯税が町に入ってきます。

あぐりん村は今年の春から始まったばかりですが、4月のオープン以降、お客様でかなり混みあっていました。6月にいったん落ち着き、それ以降は右肩あがりが増えていっています。売り上げについては、平均すると月2,500万円くらいで、客単価が1,300円ほどになります。さらに、あぐりん村直営のパン工房、おやつ工房で補っています。今のところ、順調に黒字となることが予想されています。

農家が商業的行為ができるのも あぐりん村の魅力

—あぐりん村のオープンによって、長久手町には
どのような変化があったのでしょうか？

まず、農家の方の意識が大きく変わりました。
今まで、自給的農家の方たちは、野菜を作っても
家族で食べるだけで、だんだん農業にやる気をな
くしていたところに、作ったものを売る場所がで
きて、それを買ってくれる人の姿が見えるようにな
ったことで、非常にやりがいが出てきたというこ
とです。

また、自分で値段をつけて、店に並べるという
行為が、農業だけでなく、商業的な行為に携われ
るようになったというおもしろみがあるというこ
とです。

そうしたなか、最近では、単に農産物を店に並
べるだけでなく、農家の方々それぞれが、単にバー
コードをはるだけでなく、自己紹介や野菜の説明
をつけるなど、ラベルや包装に工夫をするように
なっていて、農業を経営的な視点で見るようにな
ったとも言われています。このように、あぐ
りん村を楽しみながら、意欲を持って農業に取り
組む人が増えています。

また、町の西側に住む新しい住民の方たちは、
従来、名古屋市に視点が向いていましたが、あぐ
りん村ができたことによって、町の東側や、長久
手町の知らなかった部分に関心が持たれるように
なっていると言われます。



販売する野菜のラベルにも工夫が見られるようになった

遊休農地を減らしていくことが目標

—今後の課題について、お聞かせください。

現段階では、長久手田園バレー構想の初期の
ハード整備が終わり、組織づくりというソフトの
整備もほぼ終わり、あとはそれに参加してくれる
人を増やしていくことです。

長久手町内には、第4工区と呼ばれている遊休
農地が集中している場所があります。

自分で農業をするのは体力的に難しいけれど、
雑草を生やしたままにしておくのも嫌という所有
者の方たちがたくさんいるため、この遊休農地を
農業がやりたい方に貸します。

従来、農地は、農地法の制約があって、農家以
外の一般の方へ貸すことはできませんでした。し
かし、農業経営基盤強化促進法が一部改正されて、
法人格があり、常に耕作に従事していれば、地方
公共団体（市町村）が中に入る形で、貸すことが
可能となりました。

土地所有者が長久手町に貸して、さらに地域の
農業参加者に土地を貸すことで、遊休農地を新た
に耕作地によみがえらせるのです。

こうして遊休農地の貸し出しを進めた結果、第
4工区の遊休農地のうち、2.5haは新規農業者に
よって耕作されるようになり、従来の土地所有者
もまた耕作を始めるようになったりで、現在、遊
休農地だったところの3～4割程度が再び農地と
して使われるようになりました。それでも、まだ
遊休農地が多いので、今後、増やしていくことが
目標です。

あぐりん村は、まだまだ、産地直売品の商品が
少なく、昼過ぎには売り切れてしまうことがしば
しばです。長久手町の方にどんどん農業をしても
らい、商品を増やしていきたいと思っています。